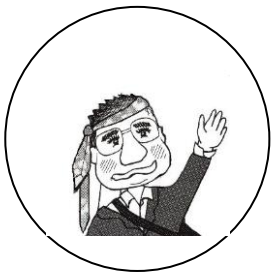
インド大魔王のエッセイ　　２０２５年９月号

大魔王のお笑い神話



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン　　ぽん子画
（530-0041）大阪市北区天神橋 1-18-25　第３マツイ・ビル 201　ＴＥＬ：06-6354-3011
お笑いエッセイのメール発信をご希望の方は、ご連絡下さい。（E-mail：daimao@travelmitra.jp）

霧が覆い隠すシッキム王国の〝神秘〟（11）

ホテルのオーナーはブーティア語族である。王族もブーティア語族である。
「何年かすると、ブーティア語族は消滅してしまうかも知れない」
オーナーは嘆いた。それは王族に関わることなのだろうか。とにかく王宮に行ってみよう。

王宮は Pandim Hotel から徒歩５分ほどのところにある。まだ霧が立ち込めている朝に、われら三人は王宮まで散歩することした。霧に惑わされたというわけではないが、王宮を行き過ぎてしまった。途中で気づき正門まで引き返したが、そこからは入場できず、通用門から入れることが分った。なだらかな坂を上がるとツク・ラカン王宮寺が最初に目についた。さすが王家の寺院だけあって荘厳されている。王位継承、仏教行事など王家の行事が行われる仏殿である。仏殿の両サイドの門衛像図や諸神などのチベット仏教壁画は見ものである。
朝の勤行中で、主尊に礼拝し、しばらく静かに座っていた。青年僧から少年僧まで太鼓とドラの響きに合わせて一定のリズムで読経が行われている。長い経典をよく記憶しているものだと感心した。
（あれれ、あくびをしている少年僧がいるぞ）
目と目で合図して、おちゃらけあっている少年（僧）もいる。見ると微笑ましい情景である。わが輩は再び一人で夕刻の勤行に参列したが、夜は朝よりも重厚な雰囲気があった。
朝・夕の勤行は荘厳で参拝の価値がある。
王宮内には僧房が多くある。数百人はいるのではないだろうか。（僧の生活費をどのように賄っているのか）広い庭園に三角錐のような大岩の塊がある。仏教の世界観を表す須弥山であろう。
庭園の奥にパレス即ち宮殿がある。パレスというと美麗で壮大な建物を想像していたが、（不遜ながら）ただの二階建ての宿屋ツーリス・バンガローにようにみえた。「僧侶王」の政治的権威「王」よりも宗教的権威「僧」の部分に比重がおかれ「華美」を避けたのかもしれない。

チベットというと「一妻多夫制度」が話題にのぼるが、財産分与による家督の分割化と分家の課税をさけるためと言われている。この制度は、少なくともインド側チベット人ではみられないものである。僧侶には①妻帯しない僧、②妻帯している僧の二種がある。さしずめ、王は②に属する。
出家の功徳を称賛して独身僧が増えれば、少子化にむかいブーティア語族は弱体化してし

まう。そのことをオーナーは案じたのであろうか。
　かつては、貧しさ故に食い扶持減らしのためにわが子を小僧に差し出したが、現状は生存を脅かすほど困窮しているわけではない。一体オーナーは何を案じているのか。
　ブーティア語族のシンボルたる王や王族は、高い教育を受け海外住いでシッキムは「別荘」扱いだ。この「教育」こそ、オーナーが案じている問題なのである。そこそこ生活が安定し「教育」による知恵がはたらくと、さらなる上昇のための「教育」が必要になってくる。その「教育」には投資が必要で子だくさんでは賄いきれない。
「最近は子どもが二人、おおくて三人の子持ち家庭が多くなってきた」
　このままいけば、やがてブーティア語族は消滅してしまう、と言った。そう嘆く、オーナーも一人っ子だ。ダージリンのように、すでにネパール語族が多数派である。少数部族ならではの不安である。

　さて、わが輩好みの観光スポートを少し紹介しておこう。

エンチェイ・ゴンパ僧院

　ガントクで最も古い寺院である。エンチェイは「孤独」の僧院の意味である。1840 年にラマ高僧ドルプトブ・カルポによって創建された。ドルプトプは「白衣のヨーギー」として知られている。本堂の裏には髭を生やし白衣を纏った像がある。現在の寺院は 1908 年第 9 代トゥトブ・ナムギャル王が建立、第 10 代シキョン・トゥルク王によって中国の五台山の寺院をモデルに中国風に改築された。本堂左の新堂は、近年に造営された。

　高僧ドルプトブの話は面白いので語っておこう。
　彼は数年間洞窟に籠り、空を飛ぶ超能力シッディを得たとされている。チベットの聖者は空を飛ぶのが好きだ。
　彼がロロン僧院の総務長（食事担当）であったとき、大施主ジンダが先祖供養のためにやってきた。そのとき天候が悪く、釜戸の火付きが悪かった。それで朝食とお茶の提供が遅くなってしまった。ジンダがそれに対して文句を言い始め論争になってしまった。その論争が僧院のラマ僧たちにも広がっていった。ジンダは「一体どちらが正しいか」とラマ僧に選択を迫った。大地主に忖度したラマ僧たちは、彼を追放することにした。しかし、この出来事は彼にとって幸運なことであった。彼はガントクに帰る途中、メナムの洞窟で修業することを決心した。数年間の厳しい瞑想と戒律を守り、シッディを得ることができた。その証として、丘の岩に足跡を刻んだ。ある日ヤンガン村の狩人が洞窟にやってきた。狩人は彼が白い肌をしているのに驚いた。それで「白い聖者」と呼んだ。
　そこから空を飛び現在の僧院がある場所に移った。ここで数年間過ごし、タクツェ丘の頂で瞑想した。そこからチベットのドロモに飛び、ブータンに移り入滅した。

ド・トゥル・チョルテン寺院

　急な階段を上がると白いチョルテン（仏塔、10m）が見える。仏塔に仏具や仏典など宗教的なものが収納されている。境内には僧院やパドマ・サンヴァバ像などが安置されている。チョルテンの基壇には 108 個のマニ車が設置されている。万灯会のような灯明が捧げられている。第 11 代タシ・ナンギャル王の時代にブータンのリンポチェ（活き仏）が建立したのでブータン人の参詣者が多い。ブータン僧が守っている。

次号は、前述したようにドライバーのプラナイさんの得意ワザを見せていだこう。